

インクルーシブ教育の視点に立った学校づくり ～ユニバーサルデザインの授業・支援体制構築を通して～

提案者 市貝町立赤羽小学校 教諭

小森 好恵

1 はじめに

2012年7月に中央教育審議会から出された報告「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」において、日本におけるインクルーシブ教育システム構築に向けた考え方、取組の方向性が示された。この報告から12年が経過し、インクルーシブ教育システムの構築が着実に進んでいるとはいえ、教育現場の喫緊の課題であるとする国の方向性と教員との意識には依然隔たりがあり、様々な課題がある。学校現場において、インクルーシブ教育はどのように受け止められ、具現化されているのだろうか。

本校では、特別支援学級に在籍している児童だけでなく、通常学級にも様々な困り感を抱えた児童がいる。また教員からも、特別支援教育への知識不足や子どもの多様性に応じた授業づくりへの課題があったことから、令和3年度から5年度にかけて、インクルーシブ教育の推進を学校課題の柱とし、研究を行った。今回は、本校が取り組んだユニバーサルデザインに基づく授業づくりや支援体制づくりについて提案すると共に、本校の様々な立場の教員へのインタビュー調査の結果から、インクルーシブ教育を推進することによる成果や課題についてまとめる。

2 提案内容

（1）ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業づくりについて

障害者の権利に関する条約の第2条に、ユニバーサルデザインは、調整又は特別な設計を必要とすることなく、最大限可能な範囲で全ての人が使用することができる製品、環境、計画及びサービスの設計をいうと示されている。教育においても、障害のあるなしに関わらず全ての子どもたちにとって分かりやすい授業づくりとして、ユニバーサルデザイン化が重要であり、インクルーシブ教育システム構築においては基礎的環境整備として示されている。本校においても、全ての児童の「分かる・できる」を目指し以下のような実践を行った。

①授業のユニバーサルデザイン

- ・視覚化
- ・学習課題設定の工夫（導入の工夫）
- ・板書の構造化
- ・ICTの活用
- ・学習形態の工夫
- ・具体物操作
- ・自己選択できる場面の設定

②人的環境のユニバーサルデザイン

- ・受容的な声かけ
- ・子どもたちのつぶやきを生かす、つなげる
- ・「分からない」と言える、「間違えても大丈夫」という安心感

③教室環境のユニバーサルデザイン

- ・1日のスケジュールの明示
- ・1時間のスケジュールの明示
- ・学習に集中しやすい環境づくり

(2) 全ての子どもを学校全体で支える支援体制の構築について

- ①特別支援学級担任と通常学級担任との連携
- ②通級指導教室担当と通常学級担任との連携
- ③ハート支援会議による個に応じた支援の充実
- ④情報交換による支援を必要としている児童の児童理解
- ⑤SSW、心の教育相談員、SC との連携

3 成果と課題

(1) 成果

- ・通常学級担任による授業改善と意識の変化
- ・教員と子ども、子ども同士、教員と教員、教員と保護者の「つながり」
- ・特別支援学級と通常学級の児童の自然な関わり
- ・多様性を認め合う温かな学級の雰囲気
- ・児童の学校生活への満足感（Q-Uの結果より）

(2) 課題

- ・特別支援学級の児童が自分のよさを発揮できる交流及び共同学習の在り方
- ・的確な実態把握に基づいた個別の指導計画の作成と活用
- ・関係機関、専門家の活用といった外部との連携
- ・保護者、地域住民に対する理解啓発の促進

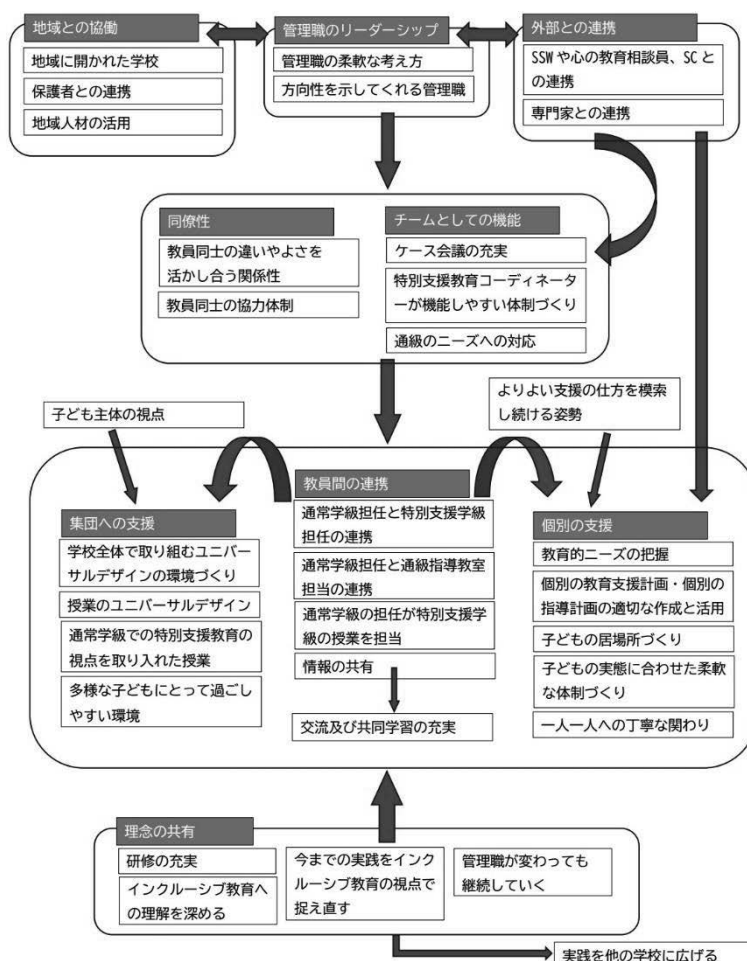


図1 インクルーシブ教育をさらに推進するために必要なこと